

カントの革命論

村山保史

カントの革命への態度は矛盾していると言われる。彼は多くの著作において革命を否定しながらも、一方では肯定的発言もしている。ここでは、この二つの側面が共に根ざす思想契機を明らかにし、カントの革命への態度を整合的に解釈する。

(1) カントの革命概念

もともと円形の回転もしくは天体の運動を意味していた革命(Revolution)は、近代初頭には、それらと類似する地球の目的論的な出来事にも使用されるようになった(『目的論的意味』)。その後、革命は、一七世紀以降の政治的出来事へ頻繁に使用され、目的論的意味を保存しつつ、それとは異なる意味を帯びてくる。革命と称される出来事の構造および結果が(劇的)であることである。カントは特に政治的革命的構造が劇的であることに注目する。目的論的意味の革命の(回転)は、ある事柄が一点を中心として諸項を循環することを意味し、そこでは諸項の価値(質)的差異は度外視されていた。しかし革命が(支配関係の変革)をもたらず政治権力の変革に用いられることにより、革命の(回転)の意味は、カントにおいては、単なる諸項の循環ではなく、価値的に異なる二項の(上下転倒)という意味となるのである(『倒錯的意味』)。カントは、目的論的意味を引き継ぎつつも、倒錯的意味の革命概念を念頭に置いていけると言える。

(2) 革命の否定

このような革命をカントはいかなる意味で否定しているのだろうか。カントが挙げる革命否定の理由は四つに大別できる。①国家を破壊する。②国家の解体を結果する。③幸福の原理を契機とする。④公開性と矛盾する。それぞれを検討する。

①と②は似て非なるものである。①は、革命家の生命と革命権を保証する国家を損なうという意味で革命(権)の矛盾性を言うのに対し、②は、革命の結果論を言うからである。しかし無血革命でさえカントは認めないので、②は革命否定の本質的理由ではない。④は、革命が広義の法的矛盾であるという意味で①と重なるように思えるが、革命が実際に公開性と矛盾するかどうか、またカントが一貫して公開性を法の必然的要素と考えているかどうか疑わしいので、革命否定の本質的理由とは言えない。残る③と①は全く異なるようで実は同じ側面をもつ。①の矛盾性を詳しく言うと、国民の普遍的結合意志としての共同体とこれに対する個人の行為の、あるべき上下関係の倒錯という意味の矛盾であると言える。国家は或る意味で道德法則の普遍化であり、革命家の行為は傾向性に基づく。ここから、国家に対する個人の革命は、個人の心情レベルでは、靱知的秩序に対する感性的秩序の関係に相当する。そして幸福の原理は後者に繋がるから、①は③の否定理由と同一である。つまり、①と③は、価値的に異なる二項の本来あるべき上下関係の倒錯を問題視しているのである。そしてこの倒錯こそカントの革命概念の核心であったから、これを否定する①と③の(革命倒錯論)が革命否定の本質的理由である。

(3) 革命の肯定

しかし革命概念自体が孕む問題性にもかかわらず、カントが革命を肯定していることも確かである。カントはいかなる意味で革命を肯定しているのだろうか。該当するカントの言葉を見てみよう。

「……この「フランス」革命は、私は言う、全ての観察者（自身はこの演劇に巻き込まれていない人々）の心意のうちに熱狂と境を接するほどの望ましい共感を見出し、実際のこれの表現は危険と結びつくほどであったし、したがってこの共感には人類に内在する道徳的素質より以上のものを原因としてもちえない、と。」
(VII, 85)

カントの革命肯定の意味は、それを一権利として法的に認めることではなく、「観察者」としての自己が抱く「共感」の対象として認めることなのである。もちろん、このような共感を抱くだけでもカントが革命に対し何か割り切れない態度をとっていることに変わりないが、この事実の確認は重要である。

(4) 対立概念による融和

われわれは、このようなカントの革命への否定的態度と肯定的態度を別々の原理から説明するのではなく、むしろ同一の思想契機からの二つの帰結として解釈する。その際の鍵となるのは、カントの「対立（反対）」概念である。

同一事が同時に肯定されかつ否定される対立には、論理的対立と実在的対立の二種ある。このうち、カントが一貫して強調するのは後者である。後者の強調により、カントにおいては徳と背徳、

快と不快がそれぞれ一方の欠如性ではなく、実在的な存在となる。そして革命に見られる倒錯は価値的に異なる二項の実在的対立を前提するゆえ、革命概念は、実在的対立概念がカント哲学に及ぼした影響を免れない。

カントによると、行為の格率を道徳法則とすることが徳（善）であり、感性的秩序とすることが背徳（悪）である。この意味で、道徳法則の普遍化である国家を感性的秩序にしたがって損なう倒錯的な革命は、社会的な不徳もしくは悪となり、一方で否定される。

ところが他方、革命は快の感情にも繋がる。カントは革命に「熱狂と境を接するほどの望ましい共感」を感じていた。熱狂は「熱情を伴った善なるものの理念」(V, 271f.)であり、熱情は「崇高」の感情の一種である。崇高は、或る事象が主観の把握作用を超過（不快）することによって、かえってそれを超える実践理性の絶対性を自覚させ生じる「消極的快」である。われわれは、革命を、あらゆる障害を（克服）する行為として観察することによって、その類似物として、不快を統一結果として快をもたらず理性の絶対的能力を意識するのである。そしてこのような不快を介した消極的快は、快に実在的に対立する不快なしにはありえない。

以上、カントの革命への肯定と否定は、カント独特の対立概念に依拠するものであり、この観点からすれば、カントの革命への態度は矛盾しないと言える。